すずがも通信（55号）

行徳野鳥観察舎友の会会報　1989年4月1日発行

特集　インドひとり旅

祝！トヨタ財団研究コンクール最優秀賞！

市川　拓画

はおと

トヨタ財団第４回研究コンクール・最優秀賞受賞決定！

東　良一

私達、行徳野鳥観察舎友の会が、トヨタ財団の助成を受け、３年間にわたって行ってきた「よみがえれ新浜――水質浄化と水鳥誘致」実験が、第４回研究コンクール「身近な環境をみつめよう」で最優秀賞を受賞しました。

改めて、毎月の生物調査や、新池造成改良工事などに腕をふるって下さった方々や、その他様々な面でご協力いただいた方々にお礼を申し上げたいと思います

ちょうど３年前、５０万円の予備研究助成金で小さな水車を１台購入し、初めて丸浜川に設置した時には、３年後にこの実験がこれほどに順調に運び、最優秀賞を受賞できるようになるとは誰も思っていなかったはずです。

半年後、本研究のチームに選ばれ、保護区内に池を造成して丸浜川の水をひきやがてその池にも生物が現れ、１年後には水鳥が繁殖し……と実験は順調過ぎるくらい順調に進みました。しかし、最優秀賞の受賞にあたっては、実験の経過だけでなく、自分達の手による毎月１度の生物調査などの地道な調査活動も評価を受けたものと思われます。夏は汗まみれになり、冬は冷たい水に手をかじかませながら、研究期間中とうとう１度も欠かさず調査は続けられました。

もうひとつ、うれしいことは、最優秀賞の他に、これから１０年間にわたって続けて研究助成を受けられることになったことです。初めて水車を回した時も、新しい池に初めて水が流れこんだ時も、そして今回の受賞が決まってさえも、誰もそれがゴールだとは考えてはいません。「よみがえれ新浜」計画はこれからいよいよ軌道に乗るところ。今までの実験の成果を踏まえ、最優秀賞の名に恥ない研究・実験活動をこれからも続け、さらに発展させていきたいと思います。

これからもご理解・ご協力をよろしくお願い致します。またご意見・ご感想等もぜひお寄せ下さい。

第４回研究コンクール“身近な環境をみつめよう”

最優秀賞と優秀賞の選考を終えて

第４回研究コンクール選考委員長　浅田　孝

まず何より、最終段階に進んだ８つのチームが、まる２年半にわたってそれぞれのユニークな研究活動を完遂されたことを喜びたい。１１月３０日のまる一日かけた報告会での発表は、さすが全国の１４０チームから選び抜かれたものだけに、どれも十分に聞きごたえのある密度の濃いもので、長時間にわたって集中して傾聴したためか、いささか疲れを感じたが、しかしそれは大変爽やかな疲れであった。委員の先生方も多分おなじであったろうと拝察する。

最優秀賞と優秀賞の第一次審査は、その報告会の熱気もさめやらぬ１２月６日に行われた。各委員はそれまでに、各チームの報告会内容や資料をもとにそれぞれの成果についてコメントを書き、最優秀賞候補一件と優秀賞候補数件とを推薦することにしていた。委員会当日はさらにすべての報告書に目を通した上で、これらチームのひとつひとつについて、優れた点や問題のある点について意見を述べあい、暫定的に１件の最優秀賞候補と３件の優秀賞候補をとりあげることにした。そしてさらにこれら４件の研究のそれぞれを、２人ずつの委員が分担して報告書を持ち帰り、研究の内容を再度精読チェックした後、それらへの授賞につき異存のないことを確認して理事会に推薦することにした。

ほとんど全員一致で最優秀賞候補に決まったのは「行徳」チームであった。何人かの委員は優秀賞候補としていたが、他のほとんどの委員が最優秀賞に推薦しており、その評価はどれも高かった。野鳥保護区の保存運動に端を発し、そこからさらに市民活動にふさわしい適正技術を活用して、保護区の鳥たちにとって好ましい環境へ向けての改善を図ってきたこのチームの活動は、さまざまの点で新しい実践的な市民科学の芽を含んでおり、将来の発展性・波及性も高い。予備研究段階から注目を集めており、大きな期待が寄せられてもいた。

優秀賞候補については、いくつかが議論にのぼったが、最終的には、「谷根千」と「アンバル」と「酪農ヴィレッジ」のチームが残った。何人かが優秀賞に、そして誰か一人は最優秀賞に推していたものである。いずれも、研究の中間段階ではまとまりに欠ける恨みがあり、多くの疑問も提出されていたが、後半に入ってからはそれぞれにとって意味のある「何か」――チーム全員で共有でき他人に対しても説得力をもつような「何か」――をつかんで、それに向けて全力を集中できたものと思える。「行徳」はその「何か」を、早くも予備研究の段階でつかみ取り、本研究の初めから明確な基本目標のもとで、全員一致の行動がとれたと言うことだろうか。

次頁へ続く

惜しくも受賞できなかった４つのチームは、その「何か」をつかみ取るのが余りに遅かったか、あるいはそれが出来なかったために、いまひとつ大きな炎に燃え上がるところまでは行かなかったということなのだろうか。ただこれらのチームについても、優秀賞としてのいくつかの推薦や今後の活動への期待が寄せられていたのも事実であり、その真理探求の熱意とそれに払われた努力においては、何ら受賞チームに劣るものでない。これは選考委員の一致した感想で、むしろこれから大きな炎へと燃え上がることを期待したい。

たまたま、前回（第３回）の特別賞が「都市鳥」で、今回も最優秀賞と優秀賞１件が野鳥関係ということになり、このコンクールは鳥に傾きすぎてはいないか、との意見も出たが、選考委員会としては決して鳥を特別に重視してきたわけではない。同じ野鳥研究といっても、この３件ではその扱いや視点は全く異なっているということを念頭においておかねばならないが、同時に野鳥を愛する人たちは全国的にも層が厚く、これまでの自然保護運動の中核としての長い歴史をもっており、しかも野鳥観察は、その気持ちさえあれば誰にも始めることができるところから、適正科学・市民科学としての素地ができていたことを反映したものと言えよう。また、アカデミズムの世界でこれまでも、非常に地味な狭い分野であったためか、逆に市民研究に残されたフロンティアも大きいと言えるのかもしれない。この地上のすべての自然が、私たちにとって如何にかけがえのない友であるか、を改めて思い知らされた作業だった。

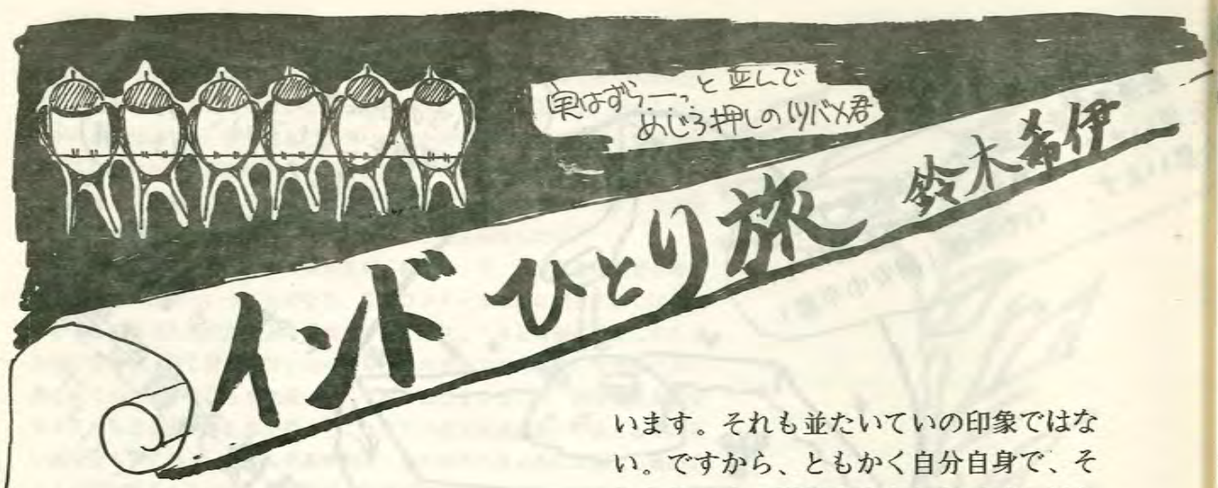
最優秀賞・推薦理由

「新浜をよみがえらす」ことを目標に、「汚水の資源化手法」「湿地の再生」「その中での鳥の繁殖」のアプローチを理論的に組み立て、実行してきたこの研究は、野鳥の観察と保護運動に取り組んできた団体が、自ら「どうする」の行動に進んだもので、８チーム中、最も高く評価された。問題解決（野鳥保護区の保存）の中で新しい問題（保護区の乾燥化）を発見し、その解決（保護区の湿原化）にまでとり組んだという姿勢は、賞賛に値する。

一般に野鳥の会は絶対自然保護の立場をとることが多いが、このチームは実験生態学の立場に立っており、この種の団体の行動としては珍しい。その目標は明確であり、それに至るプロセスも生き生きしている。しかも実施レベルでは、新池の造成にみられるように柔軟な行動をとっており、目標と実行のバランスの点でも高く評価できる。

専門家のアドヴァイスがあったにはせよ、水車による汚水の浄化から野鳥保護区の新池造成、そして野鳥の繁殖に至る過程は極めて新鮮でドラマチックである。メンバーは鳥についてはプロに近く、生物調査は信頼がおけるが、それだけでなく、簡易法ながら水質の化学分析（ＢＯＤ、Ｎ、Ｐ）にまで踏み込んでいるのは、市民の研究として希である。また、家族ぐるみの調査、簡易手法の探索、池造成等の集団作業など、「誰でも」「何時でも」の分担による研究運営は、市民科学・適正科学の優れたモデルともなろう。

ただし、将来については危惧がないわけではない。生態系を見る時には、その影響がゆっくり現れること、そして現れた時にはもとに戻らなくなっていることに注意し、細心のアセスメントが必要である。その点、都市の汚水には何が入っているか分からず、ＢＯＤ、Ｎ、Ｐを見ているだけで果たして大丈夫かとの懸念がある。これは、市民科学のレベルを越えるものであり、もしこの計画を継続・拡大するつもりなら、専門家を交えた慎重なアセスメントが必要であろう。さらに、環境の生物・化学的研究については一応の筋道がつけられたので、できれば歴史的・社会的側面をも押さえてほしい。それは保護区とその周辺環境の存続条件を見出す道につながることにもなろう。



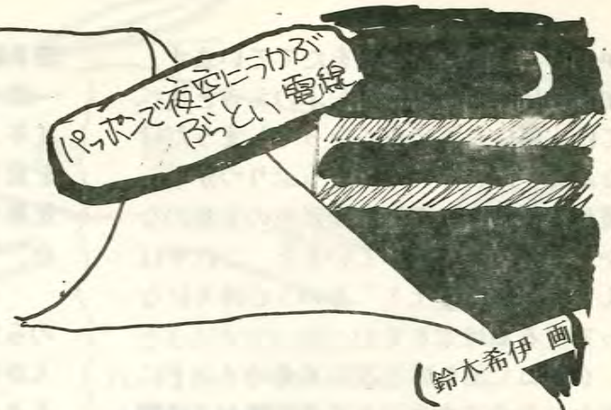
インドひとり旅

鈴木希伊

１２月１８日〜１月１３日、昭和と平成（それだけではなかったかも……）の時代をまたいで、タイのバンコク経由でインドを一人で旅行してきました。

「なんでまたインドに、それもわざわざ一人で？」と友人達は首をかしげ、両親は心配顔。私自身も、肝炎、コレラ、赤痢、マラリアに狂犬病とオソロシイ病気が次々に頭にうかび（予防注射も痛かったし）、さらには人さらい、置引き、すり、ひったくり、とおどかされて、お金とパスポートだけは文字どおり肌身離さず、と「お大事袋」をつくって首にかけ、シャツの下にしまい、あとは盗られてもどーでもよい着替えもなんにも入っていない軽いデイパック一つのみ。出かける直前には“本当に帰ってこられるのかしら”と真剣に心配して、不安いっぱいで出発したわけです。こんなことを書くとインドのイメージを悪くしてしまいそうで気がかりですけど、ある意味では日本が安全すぎるのかも。それでも、どうしてもインドに行ってみたかった。インドについての本や旅行記は山ほどあるけれど、書かれている印象はひとりひとり全部まったくと言ってよいほど違っています。それも並たいていの印象ではない。ですから、ともかく自分自身で、それも他の人の影響をぬきにしてインドという国に向き会ってみたかったのです。もうひとつ、インドを意識する前から憧れていたはるかなるタージ・マハルをこの目で見たかった。

まずタイはバンコク到着。暑い。むっその暑さと何ともいえない騒々しさ。浅黒い肌の人々、飛びかう活気に満ちた音楽的な言葉は、鳥好きな私にはハイイロハッカチョウの声を思わせます。ねっとりと重たいような熱帯の空気は夜が明けると抜けるような爽やかさに変わる。



道路はアメリカ的すごさのハイウエイ（実はこれ、ベトナム戦争の遺産）がびしっと整備されてるのですが、タイの車（とはいっても、マーク２、ローレル、スターレット、と日本車だらけ）は車線などというものは頭から無視。車と車の間にすきがあれば、なんのてらいもなく減速もせずにつっこんで行きます。前がつまっているのはわかっているのに、滅多ら[illegible]らとクラクションをぱっぱか鳴らします。バックミラーなんてのはついてないから、とにかく前しか見ないみたい。街を１時間も歩けば、顔が排気ガスで黒くなってしまうほど。それでも事故も起きず、タイの人はみんな平気で歩いているし、おどおどしているのはわれわれ異国人だけ。ここなりの秩序があるんだなあとあたり前の感慨。

ついでながら、売春都市としての側面も知られるバンコクですが、その中でも一番にぎやかといわれるパッポン通りという繁華街に夜行ってみたところ（ひとりでじゃありません！三人で、です）、通りの両側にはきんきらきんの高級ディスコ、開け放たれたとびらの奥、うす暗い店内に見える裸のダンサーたち。でもよくよく見てみると、そこにいるのは客引きのおじさんと、ダンサーさん売春婦さん以外はほとんどが外国人。とくに日本人はいいお客らしく、日本語の通じる店や日本語の看板もちらほら。やっぱりねえ。なんかいたたまれない思い。たまたま出会った日本の人のことば。「日本がタイをめちゃくちゃにしているのが、ここを見てるとよくわかるなあ。」ずっしり重かった。

そういった状況下で一つほっとしたのは、街中にいるスズメが日本と同じ姿をしていたこと。ムクドリそっくりのハイイロハッカチョウもいます。屋根も壁も赤青黄色にきんきらぺかぺかのモザイク模様。こういう顔をしたカラフルな仏像のある寺院の庭のしばふにひょこひょこ歩いている彼らの姿をみて、なんか日本を出てもう何年も経ったような気がしてきてしまったのでした。

しかしまあ、目に入るものといえばとにかくきんきらきん、空はまっ青ぎらぎら。金色に輝く軒先には風鈴が下がり、

からからと楽しげな音をたてています。初めは日本のわびさびしぶのお寺と比べては、何にも言えなくなってしまうだけなんですが、その中にどっぷりつかり、強烈な南国のひざしと極彩色の光景のなかで風鈴の音を聞いていると、これぞほんものの極楽浄土！　という心持ちになってくるわけでして……。

タイに二泊して、次に本命のインドに向かったのですが、まず飛行機が３時間ほど遅れまして、デリー空港に着いたのが夜中の１時。ということで、この旅行記も、あとは次回のおたのしみ。

筆者紹介

鈴木希伊さんは東京農工大学獣医学科４年。「砂漠で野宿したんですよね。目を覚ましてみたら、寝ていたまわり中、足跡だらけ。鳥とか、虫とか、トカゲとか、リスとか。」うわーっ。

「まち中にうろうろしているのら犬、のら猫、のら牛。段ボールの箱なんか、人がぽいっと道に捨てるんです。そうするとのら牛がたたっと寄ってきて、ばりばりっと食べちゃうんですよ。インドって国の大きさ、日本とはまったく違った豊かさ、包容力というようなもの‥‥」

好きな鳥はハシビロガモ、コバタン、ゴイサギという、やっぱり相当異色なキャラクター（怒らないでね！）。農工大出身の女性には面白い人が多いんです。次号をお楽しみに。

インドひとり旅ー第１回（タイ編）ーはいかがだったでしょうか。
次回からは特集とは別のコーナーを設けて連載の予定です。（編集部）

ありがとうございました

ご寄付 [redacted]

おわび

前号の発送の際、手違いにより別の会員の方の領収書が同封されてしまった方が多数ありました。ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。

来月まで覚えていてね！

すずがも通信の発送は奇数月の最終日曜（次は５月２８日）の予定です。この日は楽しい（？）底生動物調査もあります。お菓子もたいていあります。ぜひどうぞ。

新入会員

[redacted]

住所変更

[redacted]

鳥の国から

蓮尾純子

ホー　ホケペチョ、ホー　ホケキキョウグイスの声で目をさます、というのがこのところのぜいたく。ひいき目なのかも知れませんが、観察舎南西の竹やぶを根城にしているウグイスは、このあたりで一番の美声といううわさ。わが家の窓のすぐ外のマテバシイやヤマモモにもよく来て鳴くのです。割合ものおじしない鳥で、子供たちが木の両側であっちだ、こっちだと言い合っていても、平気でホー　ホケキョ。とうとう私もウグイスのさえずる姿を見ることができました。生まれて初めてです。観察舎正面玄関から事務室のあたりには、また別のウグイスがいるらしく、こちらはまだホー　ホキョとかホケコという感じでさえずっています。

２月２８日、早々と抱接しているヒキガエル（いわゆるおんぶがえる。産卵の時のスタイルです）を見ました。それから数日の間にたぶん３～４組の産卵しているつがいを見ました。餌場の池のところです。卵は順調に発生していたのですが、オタマジャクシの形に育ったのに、泳ぎ出すのは見られませんでした。丸浜川の水位が高く、何度か川から水が入っていたので、あるいは塩分でやられてしまったのかも知れません。

カモが少ない割にはタカ類がよく見られ、なかなかきれいな雄のチュウヒが時々姿を見せます。よく似たチュウヒとハイイロチュウヒは、ふつう腰のところが白い方がハイイロチュウヒと言って見分けています。ところが、この雄のチュウヒは腰がまっ白で、翼の一部と尾はきれいな灰色。タカ類はふつう雄の方が小柄なので、この雄も飛び方が割合軽快で、そんなところからもやや小型のハイイロチュウヒと混同しがち。「腰が白いチュウヒ」が飛ぶたびに要注意です。ちょいちょい出てくるハイイロチュウヒは、翼の裏のしまもようや、尾羽の太い縞でちゃんと見分けられるのですが、腰の白はむしろ小さめ。いずれにせよ、そろそろお別れの季節なのがちょっと残念です。

今年はセイタカシギが江戸川方面で越冬し、３月１３日には湊排水機場の遊水池堤で３０羽もの群れが見られました。つがいで行動したり、なわばり飛行のような行動を見せています。繁殖はどうなるか、期待でいっぱい。

勝手口のカンナが、今年はとうとう緑の葉を残したままで冬を越してしまいました。１１月まで花をつけていて、普通は霜枯れするのに、茎の一部と葉の何枚かが緑色。この分では５月ごろから咲くかも。冬ずっと暖かだったせいで、どうも春を味わう楽しみが薄れてしまったみたい。心のアンテナにみがきをかけて、張り直さなくっちゃ。

島を作る

2月11日
関　末万子

今日は友の会で島を作る日。私の島の名前は作る前から決まっていた。1メートルほどの丸い島で、名前は「ひまわり島」。そして、四月末ごろになったらこっそり何粒かひまわりの種を植えて、ほんもののひまわり島にしてしまうのが夢だった。

寒い日なので、皆さんに何か暖かい物をと思い、おでんを考えた。卵をゆで、ジャガイモを水に入れて灰汁を取り、大いそぎで船橋でおでん種を仕入れて、観察舎へ車をとばし、すべり込みセーフ。ちょうどみんなして出かけるところだった。東さんがスコップを二本持ってくれたので、後に続いて上池へ。もう池に入って掘っている人もいた。

私は下池で目的の島を作るつもりだった。道のまん中に一輪車がおいてあったので、ついでだからと押していった。これが今日の運命を左右してしまうなどとは考えもしなかった。

一輪車が着くと、待ってましたとばかり、土嚢が二個、ぽんと投げ込まれた。初めて手にする一輪車に戸惑いながら、Uターン。

投げ込まれる土嚢は二個から三個にふえたが、それでも大丈夫だった。力には自信がある。

父の影響が大きかった。女でも力持ちでなくてはいかん、自分を守るためにもと、60キロの米俵をかつぐ練習をさせられたり、腕相撲のコツを教えられた。父の口癖は、“何でもよいから一番になれ！”だった。“泥棒だってよい、後世に名を残すような大泥棒になれ”と言って、いつも「お父さんなんて事を」と母のひんしゅくをかった。

兄は父の言う通り、成績は一番、妹も一番。私は一番にはなれなかったが、腕力は強かった。兄は自慢にして、友達が来ると「おい、俺の妹と腕相撲を取ってみろ、強いんだから。」とよく言った。父がいる時は父が参謀で、私は父の目の動き一つで、父に教わったコツで何時も勝った。

しかし、東さんが四個の土嚢を一輪車に投げ入れた時、さすがの私も3メートル程進んだところでバランスが取れなくて、「キャア」と悲鳴。車は横転した。

ひまわり島を作りたくて、田久保姉妹と出かけようとする背中に「関さん、一休みしたら、またお願いします。」と東さんの声。「ハーイ」と答えながら、私でも当てにされているのかと思うと、ひまわり島作りは断念した。

数十個の土嚢は池に沈み、細長い島が一つ完成した。土嚢の半分近くは私の手で運ばれたのだと思うと、島の誕生がうれしかった。何という名になるかはわからないが、参加したことに満足した。次の島作りにも参加したいと楽しみにしている。

市川　拓画

《参加者》
尾田信介　佐藤達夫　石渡あゆみ　玉置あずな　新藤知希　阪本卓也　白石隆徳　川村こういち　野口孝司　石井としひで　鈴木宏明　柳堀正喜　津端健　宮本章平　森田昭次　田久保晴孝・陽子・智子

新池改良工事　パート1

森田昭次

当日は朝から快晴で日差しは春を感じさせるが、北風がやや強く（12m／S）と肌寒いお天気。上池のグループは子供と大人計10人。昨年セイタカシギが営巣した場所を中心に大小9個の島を作り上げた。

島の大きさは、大は直径2m高さ60cm、小は幅50cm長さ1m位。島の回りの土を掘り、積み上げて長靴で踏み固めるが、なかなか鳥の座り心地の良い形にならない。お互い不慣れな手つきだが、大勢なので作業は順調に進んだ。ただし風や雨や波でも島が崩れず、安心して営巣出来るように島全体のつき固めと島周辺の葦の引き抜きは次回に持ち越しとなった。

今年は昨年の倍増、16～20羽のヒナの巣立ちを願っているのですが、そのためには「卵」をねらう蛇？対策。どなたか良い知恵を出してくれませんか。

梅津正興　峯佳孝　関末万子　清水大悟　鈴木有・裕子・舞・穣・慧　木津川信之介　角隆博　蓮尾嘉彪　横山正敏　大沢啓子　東良一

島作り

尾田信介

ぼくは　最初　野鳥の観察をしようとして観察舎に行ったんだけど、観察舎の前に人がたくさんいたので、何かと聞いてみると島を作るというので、おもしろそうだったのでやってみました。まず立入禁止の所に行きました。そこで説明をききました。そして水の抜いてある池にいきました。

そこで半径1メートル位の円を書いて回りから土を持って来てその円の上に土を置きました。そして高さ30センチ位の島ができました。それが終わると今度は、水の入っている池に行きました。そこでは土の入った袋を水の中に入れて島を作っていました。僕もその池にはいってみましたが、すごく冷たかったのでふるえでしまいました。だけど島を作れてすごくうれしかったです。

2/11島作りを終わって

蓮尾　嘉彪

「あのねェ、あした田上さん来られないんだって…」

降り続いた雨がたたって、頼みの田上さんは祝日出勤で来られないとのこと。集合時刻の10時には小中学生が15人以上も集まったというのに、友の会の主要メンバーは11時近くなったのに現われない。実に心細いスタートだった。

幸い、千葉県野鳥の会の木津川さんが来られていたので、なんとなくまとめ役をお願いし、出発しようという時、森田さん、鈴木一家と現われ、やっとほっとして出発。

干上がった上池は若者と森田さんにお願いし、木津川さんと僕は下池担当。鈴木有さんがビデオ記録担当。下池の方は、

いろいろ準備をしているうちに、午前の部、終了。

戻ってみると、図書室は島作り参加者でごった返していた。３０人はいるだろう。いいとこ１０人と思っていた島作りにこんなに大勢の方が参加して下さるとは予想外のことで、午後はのんびり下池でマスクラットの巣の案内係をしてしまった。そしてつい、午後から参加した方への挨拶を忘れてしまったのに解散してから気付いた。特に、午後からの行事として参加された千葉県野鳥の会の皆さんごめんなさい。

上池の手が十分ということで、午後は中・高校生と大人が下池の島作りにまわったが、泥をかついでの運搬には思いのほか時間がかかり、上池では島が１０も出来たというのに、下池の島作りはたった１つで終わってしまった。残念！！

この日の収穫は、下池の南側の土手にマスクラットの巣穴を１つ見つけたこと。水中に直径２５ｃｍ位の横穴が開き、穴は土手の中に上がって続いているらしい。そばには、アメリカザリガニの残骸の食事あともありました。２週間ほど前に発見された水上の巣（作りかけ）と合わせ、水中作業班の手のあいている人に交代で見てもらいました。長い長靴を持っていかった人ごめんなさい。（ビデオで見てね）。

もう１つの収穫は、作業終了後のこと。下池の中に沈めていたパイプ（ポーポーという魚とりの仕掛）をあげてみたら、ぬるっとした手応え。放流したフナと思ってそっと手の平にとってみたら、２０ｃｍ近いマハゼでした。４匹もいました。海から塑上したのではないかと思われました。まっかちん（アメリカザリガニのおとな）も１０尾以上いました。

作業が終わってから、関さんご持参、事務局長さん味つけの大鍋いっぱいのおでんをみなでいただきました。味がよくしみていて、素敵でした。

セイタカシギの島作りに参加して
（３月２１日）　**佐藤達夫**

前回に続き、２回目の島作りに参加した。作業内容は土のうを積んで島を作るもの。土のう運びはとてもつかれた。慣れない水の中で土のうを運ぶのは、長靴に水が入ってきて大変だったけど、めったにできないいい経験になった。

その他にアシを刈った。最初は学校の実習でも草刈りをやったことがあるから大したことないと思っていたけど、水の中なので思ったより大変だった。だけど鳥を見ながら鳥の生活する所で作業ができてとても楽しかった。

バンディング速報
ハクセキレイのおじいちゃん
３月１３日、国道の市川橋下にあるハクセキレイのねぐらで毎年続けられている標識調査で、１９８０年１月に放鳥された雄が再捕獲されました。
放鳥した時は若鳥（前年生まれ）だったので、間もなく満１０才になるわけです。ハクセキレイとしてはこれまでの最高齢記録だそうですが、たいへん元気できれいな鳥でした。長生きしてね！

市川　拓　画

僕のオートバイのタンクにはよくフンがついています。

ホンダのマークに親しみを感じるのでしょうか。

行事案内

誰でも自由に参加できます。参加費無料

☆定例新浜観察会（毎月第２日曜日）　４月９日、５月１４日

集合：　東西線行徳駅前　午前１０時
解散：　行徳野鳥観察舎　午後３時頃
担当：　東　良一[redacted]
共催：　日本野鳥の会東京支部、千葉県野鳥の会
持物：　昼食、飲み物、バス代（大人２９０円、子供１５０円）

春の渡りのシーズンです。美しい装いのメダイチドリやハマシギなどを観察しながら江戸川土手を歩きます。河口付近で昼食後、午後から保護区へ。新池では２度目の繁殖期に備え水鳥達が巣造りの準備を始める頃です。今年も暖かくそっと見守りましょう。小雨決行。

☆定例園内観察会（毎月第１・３日曜日）４月２日・１６日、５月７日・２１日

集合：　行徳野鳥観察舎前　午後１時半
解散：　〃　午後３時半頃
担当：　観察舎　蓮尾
協賛：　友の会

うららかな春の日の午後を、保護区の中で過ごしませんか。鳥や草花を観察しながら本土の中をひとまわりします。高層マンションも視界から消え、足下の野の花が急に身近になったような気がします。雨天中止。

☆夕暮れ観察会　４月２３日（日）、５月２８日（日）

集合：　行徳野鳥観察舎　午後５時
解散：　〃　午後６時半頃
担当：　鈴木

日がすっかり長くなりました。このまま終わってしまうには、ちょっともったいないような日曜日の夕暮れ時、保護区の夕暮れ観察会はいかがでしょう。ネグラへ帰る鳥達などを観察しながら、保護区の中を歩きます。まだまだ寒いので上衣を余分にお持ち下さい。雨天中止。

☆丸浜バードリバーを調べよう　４月２３日（日）、５月２８日（日）

集合：　行徳野鳥観察舎　午前１０時
解散：　〃　午後３時頃
担当：　東　良一[redacted]
持物：　長ぐつ、タオル、ビニール手袋

最優秀賞も決まり、「よみがえれ新浜」計画もいよいよ軌道に乗ります。この毎月１度の生物調査も受賞を支えた大切な立て役者。野鳥の観察、水質調査、等々……何でも興味のおありの方は是非ご参加下さい。小雨決行。

☆春休み子供観察会　　3月30日（木）　　市川　拓 画

集合：　行徳野鳥観察舎　午前１０時
解散：　　〃　　午前１２時
担当：　東　馨子[redacted]

子供のペースでのんびりと保護区の中を歩きます。雨天中止。

☆真間川の桜並木満開キャンペーン　　4月1日（土）、2日（日）

場所：　富貴島小学校裏手
主催：　真間川の桜並木を守る市民の会、平松　南[redacted]
協賛：　友の会

例年通り、真間川沿いでパネル展示やせっけんの販売が行われます。超暖冬で急ぎ足の桜が待っていてくれればよいのですが……。友の会も展示や販売を行います。

☆水鳥カウント　　4月29日（土・祝）

行徳周辺の水鳥の数を数えます。参加ご希望の方は東[redacted]までご連絡下さい。

市川　拓 画

☆サギ山観察会　　4月30日（日）

集合：　行徳野鳥観察舎　　午後1時半
解散：　　〃　　午後4時頃
担当：　蓮尾

定員３０名。予約制ですので東[redacted]まで必ず電話でお申込下さい。定員になり次第、打ち切らせていただきます。雨天決行。

☆バードウィーク特別行事　　5月13日（土）

例年通り、観察会・映画会等が行われます。詳しくは野鳥観察舎[redacted]蓮尾までお問い合わせください。

編集後記

☆ぎっくり腰と原稿締切が交互に襲うという最悪のスケジュール。空白の日々はコタツでいねむりしています。いったい私は何をやっているのだろうか。（純）

☆１時間も遅刻して図書室でのそのそ編集。反省しています。おわびにホットニュース。小学生の尾田信介君が編集手伝いを申し出てくれました。乞うご期待。（Ｄ）

すずがも通信　Ｎｏ．５５　　１９８９年4月1日発行
発行所　行徳野鳥観察舎友の会　　年会費　一般1000円、ジュニア500円
発行人　東　良一　[redacted]
事務局　[redacted]
編集　清水大悟、蓮尾純子　　編集協力　東　馨子、市川　拓、尾田信介
行徳野鳥観察舎　[redacted]